重訳版『内乱史』第２巻

――カエサルの覇業――

アッピアノス（著）
ホレイス・ホワイト（英訳）
今居清綱（邦訳）

目次

訳文についての覚え書き iv

『内乱史』第 2 巻 1

第 1 章 1
カティリーナの陰謀――キケロによる発覚――陰謀者たちが逮捕され処刑されたこと――ピストリアでの戦闘とカティリーナの死

第 2 章 5
ヒスパニアでのカエサル――カエサル、ポンペイウス、クラッススの三頭政治――カエサルの農地法――都で騒擾が起こり、カトーが公共広場からつまみ出される――ウェッティウス事件――カエサルによる騎士の懐柔と彼のガリア総督指名――カエサルがポンペイウスに娘を嫁がせる

第 3 章 10
クロディウスが裁判抜きで市民を処刑したとしてキケロを起訴する――キケロの亡命と帰国――カエサルのルッカでの会談と公共広場での流血沙汰――三頭が統治権を分割する――カエサルの娘の死とローマの政治生活の惨状――ポンペイウスとミロ――クロディウスの殺害――続いて起こった混乱――ポンペイウスの単独執政官就任と彼の反収賄法

第 4 章 15
収賄への訴訟――カエサルが不在中の執政官職への立候補を正当化する――マルケッルスの敵対行為、カエサルから指揮権を剥奪しようという諸々の試み――ポンペイウスも指揮権を放棄すべきだとクリオが訴える――元老院でのカエサルへの敵意の増大――ポンペイウスが戦争準備をなおざりにする――両執政官がイタリア防衛をポンペイウスに委ねる

第 5 章 22
カエサルがポンペイウスと同時に武力を放棄することを申し込む――元老院によるカエサルの公敵宣言、カエサルが兵士にかけた言葉――公然たる宣戦布告――カエサルのルビコン渡河とアリミヌム占領――イタリアでの混乱と予兆――ポンペイウスがカプアの軍の方へと出発する

第 6 章 26
カエサルがコルフィニウムとルキウス・ドミティウスを手中に収める――両執政官がデュッラキオンに渡海する――ポンペイウスがブルンドゥシウムでカエサルを振り切る――カエサルが国庫から資金を引き出す――カエサルがヒスパニアに進軍する――同地のポンペイウス軍を捕える

第 7 章 32

クリオのアフリカ遠征——クリオの敗死——プラケンティアのカエサル軍の反抗——カエサルの独裁官選出
第 8 章 36
ポンペイウスの戦力——ポンペイウスが軍に向けて行った演説——ブルンドゥシウムのカエサルの様子——彼が兵士に語り掛ける——カエサルのエペイロス渡航、オリコンとアポッロニアの占領——デュッラキオンへの進軍——デュッラキオン前での野営地設営
第 9 章 40
カエサルが小舟でアドリア海を渡ろうとする——援軍派遣、アントニウスが残りの軍と共に到着する——デュッラキオンでの小競り合い——カエサルがポンペイウスを包囲しようとする——デュッラキオンの戦いでカエサルが破れる
第 10 章 45
カエサルが兵を激励する——テッサリアへの進軍——ポンペイウスがパルサロスに陣を敷く——カエサルの食糧不足——ポンペイウスが遷延を望むも軍議にて却下される——会戦前の数々の超常現象——パルサロスの両軍——同盟軍と傭兵
第 11 章 52
両司令官の演説——戦闘準備——パルサロスの会戦——ポンペイウス軍の総崩れ——ポンペイウスの逃亡——両軍の損害
第 12 章 59
ポンペイウスがエジプトへ航行する——ポンペイウスが同地で殺害される——ポンペイウス派のアフリカへの撤退
第 13 章 63
カエサルのポンペイウス追討——小アジア通過——アレクサンドレイア戦争——パルナケスとの戦争——カエサル軍でのもう一つの反抗——カエサルが軍を要望通り除隊させる——彼らの懇願を受けて彼らを軍役に戻す
第 14 章 67
カエサルのアフリカ渡航——カエサルに対し用意された軍勢——タプススの戦い——ウティカでのカトー——カトーの自害——ユバとペトレイウスが刺し違える
第 15 章 71
カエサルの四度の凱旋式——カエサルがヒスパニアの若ポンペイウスに向けて進軍する——ムンダの戦い——若ポンペイウスの逃亡と死
第 16 章 75
カエサルへ捧げられた異例の栄誉——カエサルが親衛隊を解散する——カエサルが王位を手に入れようとしているという風評——アントニウスがルペルカリア祭でカエサルに冠を被せる——カエサルがパルティア人に対する遠征を計画する——カエサルの生命に対する陰謀——指導者ブルートゥスとカッシウス——他の共謀者たち——ブルートゥスがアントニウス殺害を防ぐ——カエサルが元老院に登院する——玄関口での凶兆——カエサルが殺害される

第 17 章 85
都での混乱——殺害者たちのカピトリウム占拠、ローマ社会の腐敗——共謀者たちが賄賂を配る——ブルートゥスとカッシウスがカピトリウムから下ってくる——アントニウスへの妥協の提案——アントニウスの応答
第 18 章 89
アントニウスが元老院を招集する——カエサル殺害に関する討論——狡猾なアントニウスが自制的な布告を提案する——これが拒絶される——レピドゥスの演説——アントニウスが元老院に語りかける——元老院が殺害者たちへの恩赦とカエサルの諸々の法の承認を議決する
第 19 章 95
ピソがカエサルの遺言状読み上げを呼びかける——ブルートゥスが人々に語りかける——彼の演説が賞賛を受ける
第 20 章 98
カエサルの遺言状の読み上げ——アントニウスの追悼演説——大衆が憤慨する——殺害者たちが都から逃亡する
第 21 章 102
カエサルとアレクサンドロスの比較

訳文についての覚え書き

本書は古代ローマの歴史家アッピアノスがギリシア語で著した『ローマ史』のうち、ローマでの帝政樹立に至るまでの内乱を記録した『内乱史』のホレイス・ホワイト（アメリカのジャーナリスト・経済学者）による英訳（The Civil Wars, 1899）を底本とし、これを日本語に重訳したものである。今回の分冊は全5巻のうち第2巻である。

本書を読み進めていただくにあたって凡例的な点をいくつか記しておく。

（1）本書の目次の各章にある小見出しはギリシア語原文にはなく、底本にあるものである。このうち一部の見出しは必ずしも節ごとに対応していないため、邦訳者の判断で一部統合した上で各節の冒頭に配分した。

（2）底本ではしばしばローマ市が「the city」と表記されている。日本語では一般名詞としての「都市」と見分けがつきにくくややこしいため、ローマ市を示す場合は「都」と、それ以外の都市の場合は「都市」と訳し分けた。

（3）本文中の〔　〕は邦訳者による補いで、（　）は底本にあるものである。漢数字の注は底本にある（つまり英訳者による）注、アラビア数字の注は邦訳者による注である。

（4）固有名の長母音と短母音は区別せず、長音は煩雑なので省略したが、人口に膾炙し、その表記の方が通りが良いと思われたものに関しては便宜主義的ではあるが長音を残した（カトーやブルートゥス、ローマなど）。

（5）本書の「カエサルの覇業」という副題は一目で内容が分かるようにするために邦訳者が独自につけたものである。

（6）本書は学術的な貢献を期してというよりはむしろ邦訳者自身のような一般の歴史好きの知的好奇心に応えるために訳されたものである。邦訳者としては手を抜いたつもりは決してないものの、重訳である点、用いたテクストの古さ、一介の好事家に過ぎない邦訳者の資質等を鑑み、何らかの資料として用いる場合は他の資料、底本なりギリシア語原文と突き合わせることをお勧めする。

そして最後に。邦訳者の個人サイトでは翻訳活動支援の寄付を「投げ銭」の形で募っており、最終巻でまとめて挙げる予定の参考文献の購入資金の一部はこの寄付から支出されている。末筆ながら、趣味が高じて翻訳を進めるようになったこの一介の好事家の翻訳活動を、応援してくださった皆様に記して感謝申し上げる。

二〇二二年七月

今居清綱

『内乱史』第２巻

第１章

カティリーナの陰謀

1　スッラの支配とその後のセルトリウスとペルペンナの軍事行動の後、ローマ人のもとで似たような質の内乱が他にも起こった。これはガイウス・カエサルと大ポンペイウスが互いに戦争を行ってカエサルがポンペイウスを片付け、王権を振るおうとしていると責められたためにカエサル自らも元老院の席で殺されるまで続いた。どのようにしてこれらの事柄が起こり、ポンペイウスとカエサルが命を落としたのかについてはこの『内乱史』第二巻で示すつもりである。ポンペイウスは、以前よりいっそう数を増していた海賊を海から一掃してポントス王ミトリダテスを倒し、東方の他の諸族を平定したばかりだった。カエサルはまだ若者だったが、演説と行動は力強く、何をするにも果敢で、あらゆることに野望を持ち、栄誉の追求のためなら度を超して物惜しみしなかった。まだ造営官で法務官ではあったが[1]彼は大借金を抱えており、驚くほどに大衆べったりであり、大衆は気前良く大枚を叩く人に向けて常に賞賛の歌を歌うものだ。

2　この時にルキウス・カティリーナ[一]は有力で非常に令名高く、高貴な生まれだったが、向こう見ずな人物だった。子連れの男と結婚する気がなかったアウレリア・オレスティッラへの愛故に彼は我が息子を殺したと信じられていた。彼はスッラの友人で、熱心な支持者だった。彼は己の野心を満足させようとして[2]貧困に陥ったが、未だに男女の有力者たちから媚びられており、絶対的な権力を得る一歩として執政官職の候補者となった。彼は自分が選出されるだろうと自信満々だったが、彼の腹の中の計画への疑念が彼に敗北をもたらし、当代で最も雄弁な弁論家にして修辞家だったキケロが代わりに選出された。カティリーナはキケロがはっきりしない生まれだったことから彼を「新人（ノウス・ホモ）」と呼んで（というのも父祖の力ではなく自らの力でこの名誉を勝ち取った人はこのように呼ばれていたからだ）彼に投票する人たちを冷やかし嘲弄した。彼はキケロを都生まれではなく間借り人（インクィリヌス）と呼び、この言い回しによって他の人の家を借りている奴だと呼ばわった。この時からカティリーナは、迅速かつ確実な仕方で絶対権力を目指すのをやめ、闘争と悪意で精神を満たしつつ政治か

---

[1] カエサル（紀元前 100 年あるいは 102 年生）は紀元前 65 年に造営官、紀元前 62 年に法務官を務めた。

[一] 全ての写本はガイウス・カティリーナと述べている。カンディドゥスのラテン語版はルキウスと述べている。

[2] 政務官選挙の費用として。共和政期のローマでは公職選挙の立候補者は選挙資金として多額の資金が入用となっていた。カティリーナは紀元前 68 年の法務官を務めた後に赴任したアフリカ属州では過酷な搾取を行い、属州民からの訴えで不当搾取による告発を受けた（彼に限らず、そして程度の差はあれど属州での搾取によって選挙資金を集めるのはローマの公職者では珍しいことではなかった）。

ら完全に手を引いた。彼は夫が蜂起で殺されるのを期待した多くの女たちから大金を集め、数多くの元老院議員と騎士と共に陰謀を練り、平民、居留外国人、奴隷の大群を集めた。彼の主要な共謀者はいずれも当時の首都担当法務官だったコルネリウス・レントゥルス[3]とケテグス[4]だった。彼は以前の生活での略奪による儲けを浪費していたり、似たようなことを待ち望んでいたりしたイタリア中のスッラの兵士たちに使者を送った。この目的のために彼はエトルリアのファエスラエ[5]へとガイウス・マンリウス[6]を、ピケヌムとアプリアへと他の人たちを送り、彼らは密かに兵を徴募した。

キケロによる発覚

3　まだ秘匿されていたこれら全ての事実が、高貴な婦人のフルウィアによってキケロに伝えられた。彼女の愛人で、カティリーナの共謀者であり、また元老院から放蕩の故に追放されていたクイントゥス・クリウス[7]は、自分はすぐに偉い地位につくと愛人に大法螺を吹いた[二]。今やイタリアで何が起こりつつあるのかについての噂が広まった。したがってキケロは都中に間隔を置いて見張りを配置し、事の次第を見定めるべく疑わしい諸々の場所に多くの貴族を送った。これらの事実がまだ公に知られていなかったためにカティリーナに対しては誰も敢えて手をかけようとはしなかったものの、彼は疑念が時間とともに増すのではないかと恐れた。行動の速さを頼みにしようとした彼はファエスラエへと金を送り、共謀者たちにキケロを殺して同じ夜のうちに都の様々な場所に火を点けるよう指示した。それから彼は追加の軍勢を集めて炎上中の都へと攻め込もうと意図し、ガイウス・マンリウスと合流すべく出発した。彼の自惚れはあたかも前執政官のように〔露払いの手下たちに〕自分の前を棒と杖を持ち歩かせるほどに甚だしいものとなり、彼は道すがら兵を徴募しながらマンリウスのもとへと向かった。レントゥルスと彼の共謀者たちがカティリーナのファエスラエ到着を知ると、レントゥルスとケテグスは自分たちの地位のために迎え入れられ

---

[3] プブリウス・コルネリウス・レントゥルス・スラ。紀元前 74 年に法務官、71 年に執政官を務めたが、70 年に監督官によって元老院から除名された貴族。妻ユリアは紀元前 90 年の執政官ルキウス・ユリウス・カエサルの娘で、彼女は前夫マルクス・アントニウス・クレティクスとの間にマルクス・アントニウス（カエサルの側近であり第二次三頭体制の一角。毎度毎度紹介するのも面倒なので、以降単に「アントニウス」と書く時は彼を指すものとする）を儲けており、アントニウスは岳父を殺されたことでキケロを恨んでいた。

[4] ガイウス・コルネリウス・ケテグス。レントゥルスと同じコルネリウス氏族に属する若手貴族。

[5] 前巻のレピドゥスの蜂起のくだり（第 13 章 107 節）でも触れたようにこのエトルリアの都市はスッラの退役兵の植民先であった。退役兵はカティリーナ勢の主力を構成した。

[6] スッラの軍隊で百人隊長として働いた退役軍人。

[7] レントゥルスらと共に紀元前 70 年に元老院を追放された。

[二] サッルスティウスが述べるところでは彼は「海をも山をも与えようと約束をし始め」た（サッルスティウス，『カティリーナの陰謀』, 23）。

るだろうと期待しつつ、短剣を隠し持ちながらキケロの〔家の〕扉に早朝に向かい、玄関で彼と何でも良いから話をしながら入り、彼を身内の人たちから引き離して殺すことにしようと決意した。護民官ルキウス・ベスティア[8]が伝令を使ってすぐに平民集会を招集してキケロを臆病さと戦争の扇動、そして理由なく都を混乱させたとして告発し、ベスティアの演説に続いてその夜に他の者が都の一二カ所に火を放って略奪を働き、指導的な市民たちを殺すこととされた。

4　レントゥルス、ケテグス、スタティリウス[9]、そしてカッシウス[10]といった首謀者たちの計画は以上のようなもので、彼らは指定された時を待った。役人に対する苦情を述べるために都にいたアッロブロゲス族[11]の使節がレントゥルスの陰謀に加わってガリアでローマ人に対する蜂起を行うよう唆された。レントゥルスは彼らと共同でウルトゥルキウスという名のクロトン[12]の人に署名のされていない手紙を持たせてカティリーナのもとへと送った。アッロブロゲス族は疑うことなく彼らの国の保護者――ローマに保護者を持つのが従属国全部の習わしだった――ファビウス・サンガ[13]にこの件を伝えた。サンガはこれらの事実をキケロに伝え、キケロはアッロブロゲス族と途上のウルトゥルキウスを逮捕して即刻元老院の前へと連れて行った[三]。彼らはレントゥルスとの取り決めを白状し、そのうち二人はすでに出てきたキンナとスッラがそれである三人のコルネリウスがローマの支配者となると運命の書に書かれているとしばしばコルネリウス・レントゥルスが言っていたと、彼が臨席する場で証言した。

陰謀者たちが逮捕され処刑されたこと

5　彼らがこのような証言をすると、元老院はレントゥルスから公職を剥奪した。キケロは共謀者の各人を法務官たちの家に軟禁し、彼らに関する元老院決議を行うようすぐに言い

---

(8) ルキウス・カルプルニウス・ベスティア。今回の陰謀事件が勃発した紀元前 63 年に翌年の護民官に選出されていた。

(9) ルキウス・スタティリウス。騎士階級。

(10) ルキウス・カッシウス・ロンギヌス。紀元前 66 年にはキケロと共に法務官に就き、紀元前 64 年に翌年の執政官選挙に打って出たが、カティリーナ共々落選した。

(11) 南仏を南北に流れるロダヌス（ローヌ）川とアルプスの間の地域に住むガリア人の一部族。紀元前 121 年にクイントゥス・ファビウス・マクシムス（アッロブロゲス族平定の功でアッロブロギクスの添え名を得た）とグナエウス・ドミティウス・アヘノバルブスによってローマに服属させられた。

(12) イタリアのカラブリア半島の土踏まずの付け根、母指球のあたりにある。

(13) ローマの服属民はその征服者の庇護者となることがしばしばあった。したがってこのクイントゥス・ファビウス・サンガはアッロブロギクスの親族であろう。

(三) アッロブロゲス族はミルウィウス橋で行われた捕り物に内通していて抵抗しなかったが、ウルトゥルキウスは負けるまで戦い続けたと、サッルスティウスは述べている（『カティリーナの陰謀』, 45）。

渡した。一方で元老院議事堂の周りで大騒ぎが起こり、事の次第があまり分からなかったのでこれを知った人たちは不安になった。レントゥルスとケテグスの奴隷と解放奴隷は多数の職人の増援を受け、主人を救出するために裏道を通って迂回して法務官たちの家に攻めかかった。キケロはこれを知ると元老院議事堂を急いで出て必要なだけの見張りを置き、それから戻って議決を行わせた。最初に意見を口にする役を引き受けるのが執政官職にある人であるというローマ人の慣習通り予定執政官シラヌス[14]が口火を切ったが、私の思うに、それは彼が法令の執行に最も関わっていて、ひいては深慮と用心深さでは各人に優っていたであろうからだ。犯人は極刑に処されるべしというのがシラヌスの見解で、多くの元老院議員が彼に賛同したが、これもネロ[15]が彼の番になって意見を言うまでのことだった。カティリーナが戦場で打倒されて犯人たちが最も正確な事実認識を提供するまでは犯人たちは監視下に置かれるのが最善だとネロは判断していた。

6　ガイウス・カエサルはこれらの人たちの関与への疑いを払拭できていなかったが、キケロはあまりにも大衆人気があるこの渦中の人物と事を構える気にはなれなかった。カティリーナが戦いで敗れるまで待機させるためにキケロは自身の裁量でイタリアの町々に一味を割り当てるべきであり、それから議論と裁判を経ずに貴族の一員に取り返しのつかない罰を与える代わりに彼らに正規の取り調べを行うべきだとカエサルは提案した。この意見は妥当で無難なものだと見えたので元老院議員の大部分が完全に寝返ったが、それもカトーが公然とカエサルへの疑いを表明するまでのことだった。夜の訪れに気がついたキケロは（陰謀に関わっていた群衆と不安な状態で公共広場に残っていた群衆が自分たちと陰謀者について懸念し、自棄を起こすのをキケロは恐れていた）現行犯の逮捕者と同じように彼らに裁判抜きで判決を下すよう元老院を説き伏せた。元老院が閉会するやすぐさまキケロは陰謀者各人を拘留されていた家々から大衆によって知られることなく引っ立て、死を拝ませた。それから彼は公共広場へと戻って彼らが死んだことを知らせた。群衆は驚いて四散し、自分たちのことが発覚しなかったことを祝った。こうしてその日に重くのしかかっていた大きな恐怖の後に都は今一度胸を撫で下ろした。

ピストリアでの戦闘とカティリーナの死

7　カティリーナはそのうち四分の一がすでに武装したおよそ二〇〇〇〇人の兵を集め、準備を完遂させるためにガリアへと動いたが、この時にもう一人の執政官アントニウス[16]が

---

[14] デキムス・ユニウス・シラヌス。紀元前 62 年の執政官。カエサルを殺害したマルクス・ユニウス・ブルートゥスの母セルウィリアと結婚し、ブルートゥスの継父となった。

[15] ティベリウス・クラウディウス・ネロ。紀元前 67 年のポンペイウスの海賊討伐作戦にヒスパニア方面担当の副官として参加しており、後の二代皇帝ティベリウスの祖父でもある。

[16] ガイウス・アントニウス・ヒュブリダ。前巻でも出てきた弁論家マルクス・アントニウス（元前 87 年にマリウス派により殺害）の息子で、マルクス・アントニウス・クレティクスの弟、そしてアントニウスの叔父。マリウス派とスッラ派の内戦ではスッラに味方

アルプス手前で彼に追いつき(四)、準備もできていないのに力を試すほどに未だ取り乱していたこの男の気違い沙汰の冒険を打ちひしいだ。カティリーナも彼に加担した貴族の誰も逃亡を良しとせず、狭い場所で敵によって全滅させられた。都を際立った危機へとほとんど陥れかけたカティリーナの蜂起の結末は以上のようなものであり、キケロはこれまでは雄弁によってのみ際立っていたが、今や行動力でも人々の口に登ることになった。彼は破滅の瀬戸際にあった国家の救済者であると異論の余地なくみなされたために満場の喝采の真っ只中で集会での感謝が彼に献げられた。カトーの提議によって人々は彼に国父にするような挨拶をすることとされた。ある人たちが考えるところでは、今日では皇帝に相応しいとみなされ、皇帝に授けられるこの称号はキケロを以て始まったという。彼ら皇帝は事実上は王ではあったものの、即位してすぐには他の称号は授けられなかった。〔国父の称号は〕時間の経過と共に、といっても当然のこととしてではなく最大の奉仕への最終的な賞品として宣言された。

第 2 章

ヒスパニアでのカエサル

8　ヒスパニア担当法務官に選出されていたカエサルは、政治資金のために支払い能力以上の借金を背負っていたので債権者たちによって都に留められていた(17)。伝えられるところでは完済のために二五〇〇万セステルティウス(五)が必要だったと伝わる。しかし彼は自分を留め置いていた人たちにできる限りの処置を行ってヒスパニアへと向かった(18)。この地で彼は公務の処理、法廷の監督、こういった類いの全ての事柄を怠ったが、これはこれらが自分の目的には無益だと考えたからだった。しかし彼は軍を動員し、全土がローマに貢納するようになるまでヒスパニアの独立諸部族を一つ一つ攻撃した。また彼はローマの国庫に多額の金を送りもした。これらのために元老院は彼を凱旋式の栄誉で讃えた。彼は執政官職

して財を成したが、数々の悪行を理由として紀元前 70 年に元老院から除名される。紀元前 63 年の執政官にキケロと共に当選して元老院復帰を成し遂げた。

(四) この戦いはアペニン山脈の南部の麓のピストリアで戦われた。ローマ軍が執政官アントニウスではなく彼の副官で、サッルスティウスから「三十年以上にもわたって高級将校、隊長、副官、プラエトルを務めて大いなる名声をもって従軍していた」と称されたペトレイウスによって指揮されていた。その上この戦いは捨て鉢で血みどろの戦いでもあった（『カティリーナの陰謀』, 57-61）。

(17) 紀元前 61 年。

(五) およそ 125 万ドル。

(18) カエサルは大富豪のクラッススに助けを求め、ポンペイウスとの権力闘争に際してカエサルを味方につけたいと思っていたクラッススが借金の保証人になったため、カエサルは出発できた（プルタルコス, 「カエサル」, 11）。